

## ■総評■

### 成長につながるきっかけに - 「共感寄付」第2期の選考を終えて

選考委員長 久保幸一

(日本政策金融公庫 神戸創業支援センター所長)

“共感寄付”、寄付者が応援したい活動を選び、自分の意思でその活動に寄付を行う仕組みです。これまでの寄付行為との違いは、寄付を受ける団体がどのような活動を行い、寄付金がどのように使われるのかといったことを明確にし、寄付者に伝えることにより、その活動に共感を覚えた寄付者が自分の意思で寄付を行うというところです。

共感寄付の募集は今回で2回目になりますが、9件の応募がありました。どの団体も地域や社会の課題を解決するため、アイデアを絞り、積極的に活動し、日々奮闘されている団体ばかりです。

選考基準は、「支え合う社会をつくる活動か」、「ニーズを踏まえ、目的が明確で実現方法が適切か」、「寄付金で充当する活動として適切か」、「寄付集めに積極的か」、「市民の参加を重視し、積極的に情報開示をしているか」という5つの基準になっています。

委員会では、これらの基準に照らし合わせながら、各団体の特徴や取組、現在の課題、今後の展開も含めて広い視野で選考を行いました。委員には、NPO、行政、マスコミ、税理士、金融機関といった各分野の専門家が入り、応募書類やヒアリングをもとにできるだけ実際の活動をイメージしながら、各々の視点から幅広い議論を行いました。委員会の共通の認識として重点を置いたのは、この活動が実際に寄付者に共感を得て、寄付を受けることができるのか、というところです。

応募された団体は、どの団体もとても素晴らしい活動を行っているのですが、団体の中には、活動の内容が伝わりにくいものや今後の展開が分かりづらいといった団体も見受けられました。

共感を得て寄付を受けるためには、活動内容が誰にでも分かるように工夫する必要があります。また、目の前の資金確保にとらわれることなく、中・長期的なビジョンを持って、自身の活動の先にある目的を明確に示す必要があります。自身の活動のみをアピールするのではなく、自身の活動が寄付者からどのように見られるのかといった第三者的な見方も行っていかなければなりません。これまでとは少し違う視点に立って活動内容・目的等を整理し、寄付者の立場に立って団体を見てみてもよいかもしれません。

各団体には、それぞれ強みと弱みがあると思います。ある団体は、想いを伝えるのがうまく、人脈やネットワークも持っているが、事業計画や資金計画を作るのが苦手であったり、ある団体は、事業計画や資金計画はうまくつくれるが、想いを伝えるのが苦手であったりと得意であるものや苦手であるものがあると思います。

今回応募された団体にも強み・弱みははっきりと見てとれる団体がありました。おそら

く、各々の団体は、自身の強み・弱みを認識していると思いますが、それらに対してどのように取組んでいけばよいのか分からないからそのままにしているというのが正直なところではないでしょうか。しかし、自身が持っている強みをもっと発展させること、弱みを少しでもなくすことは、団体が次の展開に移るときに必ず必要になってくるものです。組織力の強化、人材育成、ネットワークの構築、事業計画・資金計画の策定等、様々な課題があると思います。それらの課題を再度整理したうえで、自身の団体の強み・弱みを理解し、他団体との連携や支援組織・専門家の活用等、次の展開に向けた取組みを行ってみてください。

全体を通して、各団体が行っている活動をいかに寄付者に伝え、情報発信していくかということの難しさを改めて感じるとともに、団体はもちろん寄付者にも意識改革を行ってもらえるよう取組んでいく必要があることを再認識しました。

今回は9件の応募のうち6件が採択となりました。今後、もっともっと多くの団体が共感寄付に応募し、自身の活動をみんなに知ってもらい、団体、寄付者ともお互いを理解しあい、ともに成長していけることを期待しています。

今回の共感寄付が、各団体、寄付者にとって少しでも今後につながるよいきっかけになれば幸いです。

## ■ 推薦理由 ■

活動名：「中途視覚障がい者の自信と笑顔を取り戻す応援をしよう！」

団体名：NPO 法人ウエルネスハート

選考委員 中田豊一

(認定特定非営利活動法人市民活動センター神戸 理事長)

人生の途上で視力が失われていく、あるいは失ってしまった絶望感と不便さがあなたにはわかりますか？と改まって問われたら、何と答えますか。正直、私には返す言葉がありません。でも、この団体で中心的に活動している方々は、そんな絶望感を何とか克服するとともに、同じような境遇にある人たちを手助けするために動き出しています。さらには、中途視覚障がい者がより生きやすい社会になるために、広く知ってもらえるよう働きかけています。

さらに素晴らしいのは、自らの障害を個性のひとつと捉えて発信していくことで、人生の困難へ対処する方法や勇気を健常者にも分かち合おうとしていることです。確かに、生涯にわたって順風満帆な人生を送れる人なんてほとんどいないはずで、その意味ではすべての人が何らかの困難の当事者なのですね。

これまでは、障がいを持った皆さん数人とそのごく周辺の人たちを中心に手弁当でやっ

てきた活動ですが、より多くの人を支援したり、より広く働きかけたりするために、資金と人手が必要になってきています。志に賛同し、ぜひともご支援下さいますようお願いいたします。

**活動名：『生きる』を支えるいのちの電話」**

**団体名：社会福祉法人神戸いのちの電話**

選考委員 西海恵都子  
(神戸新聞編集局生活文化部長)

社会福祉法人神戸いのちの電話は、「一人で抱えきれないほどの悩みや不安・孤独の中にいる時、お電話ください」と相談の窓を開け、大勢の人たちに寄り添ってきた。活動は30年を超え、年間の相談件数は12,000件に上る。

こうした息の長い、地道な取り組みの裏で、相談員150人はボランティアとしての活動に加え、相談に不可欠な研修費、さらには活動維持のために協力費を負担しているという。相談員の減少や高齢化という課題にも直面する中、同団体は活動をより多くの人たちに知ってもらうことで支援者を増やしたいと考えている。今回の共感寄付を通して理解者が増えれば、これからも電話の向こうで胸の内を語る人たちの声に耳を傾けることができる。

共感寄付にふさわしい活動かどうかを検討する選考委員会では、委員の多くから「確立された活動と認識していた。このような厳しい財政状況だったとは…」という声が上がった。同団体の活動をより多くの人に知ってもらい、みんなで支え合う活動になることを願っている。

**活動名：「小さな『消費者』を応援！『食』『お金』『環境』の出前講座をしま～す！」**

**団体名：特定非営利活動法人C・キッズ・ネットワーク**

共感寄付事務局 奈良雅美  
(認定特定非営利活動法人市民活動センター神戸)

社会的にはまだまだ馴染みの浅い子ども向けの消費者教育に、同団体は市民発として先駆的に取り組んでいます。昔に比べ、現代の子どもたちは身の回りにお金や消費に関わる機会が多くなっていますが、その中でいかに立ち振る舞うかを十分学ぶ機会はありません。

子どもたちが大人になったとき、消費者として困らないようになってほしい。そんな思いをもつ人が集まり、それぞれのアイデアから発案し教材を手作りして、地域の子どもたちに届けています。子どもたちの消費に関わるリテラシーを高めることは社会的な損失を

防ぐということにもつながり、活動の社会的意義はとても大きいと思います。

事務所費や事業費などの費用を、受講する子どもたちやその保護者から対価から回収することはまだまだ難しいなか、この活動を市民の手弁当で続けてこられました。だから今は、受講料を払っても学ぶべきという社会的意識が広まるまでのいわば過渡期です。より広い市民の関心を喚起するためにも、子ども支援に関する補助金や助成金なども活用しながら、寄付で支えていく価値がこの活動にあると思います。

**活動名：「東北復興を支援する関西の若者を応援しよう！」**

**団体名：特定非営利活動法人生涯学習サポート兵庫**

選考委員 川中大輔

(シチズンシップ共有企画代表)

阪神・淡路大震災から 18 年が経ち、「震災を知らない子どもたち」が大学生となっている。震災の教訓をつなげていくために、様々な工夫を凝らした減災教育がなされているが、災害現場の「生々しさ」を共有していくことは容易ではない。

東日本大震災では、そうした若者が数多く災害支援に関わることとなった。彼ら／彼女らの「私たちにも何かできないだろうか」というボランティアな思いの受け皿となり、その実践をサポートしているのが「ワカモノヂカラプロジェクト」である。既に 300 名以上の若者がこの企画を通じて被災地／復興地に渡っている。

そうして現場で「生々しさ」を感じてきた若者が、他の若者へと自らの経験を伝え、次の災害への備えを啓発していくことは、ピアエデュケーション(※)の観点から興味深い。若者同士だからこそ響き合うメッセージや伝え方があるだろう。若者の感性でもって、リアリティがリレーされていく減災教育が生み出されていくことを期待したい。

※ピアエデュケーション＝社会的に同等の人、もしくは同僚、友達同士が学び合い、互いに成長すること

**活動名：「小児科病棟の子どもたちに笑顔をプレゼント！」**

**団体名：特定非営利活動法人兵庫県子ども文化振興協会**

選考委員 田口智弘

(田口智弘税理士事務所)

今回の助成対象となった活動は、病院に入院している子供達にプロの舞台芸術の出張公演を実施することにより、子供たちのQOL（生活の質）を高め治療効果を上げることを目的とするもの。そのことにより、子供達の保護者の応援にもなり、また医療関係者のサポートにもつながっていくことを目的としています。

この活動に対する各委員からの評価は高く、なかでも、「支えあう社会」をつくる活動としての有効性に関しては、全委員が最高点であるAと評価。その社会的意義は高いと認められます。また、過去の病院公演等の実績から見ても、活動の目的及び実現方法には十分な適切性を推定することができます。

よりよい活動に向けてのアドバイスとして、団体側からの課題にもあげられているように次世代の担い手育成も視野に入れておくとよいでしょう。一回の公演活動に寄付を使用して終わらすのではなく、組織基盤の強化を図るのが継続性の視点から重要なのではないかという意見です。これからの課題としてより一層努めていただければと思います。そして、発信力の強化により、社会的認知が向上することに期待いたします。

**活動名：「子育てを応援する人を育てるプロジェクト」**

**団体名：特定非営利活動法人保育ネットワーク・ミルク**

選考委員 横山佐和子

(兵庫県企画県民部県民文化局長)

長年にわたり、孤立しがちな子育て中の親、特にお母さんに、いち早く焦点をあてた活動を続けてこられた「保育ネットワーク・ミルク」に心より敬意を表します。

今でこそ、「孤（こ）そだてママ」を防ぐ取組が進みだしていますが、何より大切な子どもを守り育むには、親のサポートが大切と気付き実行され、またこの度は、情報量の豊富な都市部を離れて篠山市民センターを活用した取り組みを進められることは、意義深いことと感じています。

これまで蓄積されてきたノウハウを生かしながら、「保育ネットワーク・ミルク」さんの力量なら、記載されているご提案をもっと超えた、重層的なネットワークが広がると信じています。

この度も、篠山で地域の活性化にとりくむ団体との連携を図ることにより、男性や、これまで子育ての分野とは遠かった方々など、新たな仲間を増やしていかれることを強く期待しています。

子どもや若者が夢を描くことができる世に中であり続けていくよう、ともに手を携えていきましょう！